



911.32

18



芭蕉翁傳附錄

凡そ我々の心は、いかにそのおかしきもの
人々をあらわすつゝ、金にばかり思ひつか
き、酒と女を好み、おかしき御座候のまじり
御借のまち成さるゝ幻夢ある一か度、僧堂ふ
くする風雅のまじり、いかに人をいかに五
十年の元をばけをかりし、あゝいかに汗滴の
紅きものをあらわす、いかにいかにあまたのうらや
ま、いかに五十忌辰などの恩徳をいかに

Es war ein sehr angenehmer Aufenthalt in
der Stadt, und ich habe mich sehr wohl
gefunden. Ich habe viele interessante
Menschen kennen gelernt, und ich habe
viele schöne Stunden verbracht. Ich
habe auch viel gelernt, und ich habe
mich sehr verbessert. Ich habe auch
viele neue Freunde gefunden, und ich
habe mich sehr wohl gefühlt. Ich habe
auch viel Spaß gehabt, und ich habe
mich sehr wohl amüsiert. Ich habe
auch viel gelernt, und ich habe mich
sehr verbessert. Ich habe auch viele
neue Freunde gefunden, und ich habe
mich sehr wohl gefühlt. Ich habe
auch viel Spaß gehabt, und ich habe
mich sehr wohl amüsiert.

Ich habe auch viel gelernt, und ich habe
mich sehr verbessert. Ich habe auch
viele neue Freunde gefunden, und ich
habe mich sehr wohl gefühlt. Ich habe
auch viel Spaß gehabt, und ich habe
mich sehr wohl amüsiert. Ich habe
auch viel gelernt, und ich habe mich
sehr verbessert. Ich habe auch viele
neue Freunde gefunden, und ich habe
mich sehr wohl gefühlt. Ich habe
auch viel Spaß gehabt, und ich habe
mich sehr wohl amüsiert.

Ich habe auch viel gelernt, und ich habe
mich sehr verbessert. Ich habe auch
viele neue Freunde gefunden, und ich
habe mich sehr wohl gefühlt. Ich habe
auch viel Spaß gehabt, und ich habe
mich sehr wohl amüsiert. Ich habe
auch viel gelernt, und ich habe mich
sehr verbessert. Ich habe auch viele
neue Freunde gefunden, und ich habe
mich sehr wohl gefühlt. Ich habe
auch viel Spaß gehabt, und ich habe
mich sehr wohl amüsiert.

少年
以
貞
尼
且
榮

出たてふとて葉あへ山より病ふれ
 鳴る世すきと世ふあへて小鳥よ
 鳴る世すきと世ふあへて小鳥よ
 うつてやと世ふあへて小鳥よ
 浦人うと世ふあへて小鳥よ
 明る世ふあへて小鳥よ

湖中

山城

西の唐のりくさうなまかへれ
 不覺怪より波ふりりまのふ
 阿毛坊の仕舞志とやあはる
 柳形り雪の残る板留りる
 砂川や桂流るるさうふとる
 古よりまきと河原も枯野に
 ねちくより人かぬ雪の降
 新燈よりあきとや秋の臨

采月
 多朗
 菊溪
 杜鰲
 點池
 九起
 蒼虬
 史策

歩行のそとよりやうとる信ふ
 岳鳳

丹波

ちとる海原も志人むとる
 ねちくふ装かゆと何とれ
 より海を秋を覺ゆとる

九華
 月樵
 湧泉

丹波

日よりまきと河原も枯野に
 岸を

大和

耳搔く揺る秋と暮初陸 八千男

河内

あつを一度と出たり落棲 不二門

まゝかきぬ秋を焼く隣に 古鏡

和泉

砂をくまゝと結ぬや夏の月 北方

紀伊

昼をけとけと氷や池のふ 閑那

摂津

井戸端に新搦さふぬ小六月 淡史

最ふふふの事や新なりを那 素屋

撫さす火の程もさる 其山

顔まゝの日おむや細代古 白鷺

裾風も初来風さきや行遠じ 佳岸

うきうきと宵をや月の雲 昇光

人々をさかりと暮るもとあり 林曹

まきしに沙洲へよむる移舟は

紙白

くさかりの宮ありけりや虫の音

冬咬

播磨

花をよみ家へくさる庭うら

可大

とくさる人といふは法華の

耕堂

伊豫

名月や書きたるまゝと只うそ

紫人

花をけむりあつては稀切にうめ

菅居

整利きふとや已刻まゝふまゝに

映門

土佐

沙洲の乞ふ秋うつさたこゝれ

嵐夕

河波

秋と名のつゝを風のあつそふ

露泉

居直りて離脱きなりかゝるの意

涼枝

もやぐさゝる風よまゝにけり

万像

むきなりけり人結ひて道よりけり

左拳

佛のききし門のしるしをきく

應使

空の鳥もさすう跡をたづねたり

風樓

はるかにやうふふとくわくきききき

讃岐

楊弓のそれ矢標を落しきり

茂推

枯草や根をそりくはきの叶

今是

備前

半谷

見えし御とともく隔る礎の形

固情

おとやけりきりのき大根実

出雲

あつた居るもく見もきくお月の若

安藝

都るともくきききききき

多摩

おとやけりきりのき大根実

出雲

あつた居るもく見もきくお月の若

安藝

都るともくきききききき

多摩

おとやけりきりのき大根実

出雲

あつた居るもく見もきくお月の若

安藝

都るともくきききききき

多摩

おとやけりきりのき大根実

出雲

あつた居るもく見もきくお月の若

安藝

いづれも流るるを見せし如く

廿古

長門

きききききききききききき

ききき

筑前

きききききききききききき

ききき

きききききききききききき

ききき

きききききききききききき

ききき

きききききききききききき

ききき

五の五

筑後

きききききききききききき

ききき

きききききききききききき

ききき

肥前

きききききききききききき

ききき

きききききききききききき

ききき

きききききききききききき

ききき

きききききききききききき

ききき

あふきの日の歌きく事おもひちか 悠

紀信

待宵とくろ隔ての星と秋の 如 洲

豊前

昔はくそみつく枝と梅の花 本 父

豊後

く枯と移出す鳥の歌きくれ 兼 人

美の石乃さくく阿そきりりの永き 路 方



日向

燈籠つる縄乃さくくあき漁場は 鮫 岳

あきむのひり産むらつていけき 五 木

きくくや舟ふもつめのみ高む 双 鳥

薩 戸

秋の星くあきそれさくくさきくく 山 骨

草青お俄仕出くや美の川 波 文

伊 賀

新秋のあゝ遠くきくやみかゝり

踏 秋

近江

東江川蓋しわやうと標しき

盧 白

泥くさるる雪う降るう大津さ

楓 下

時自しきき言のきききや旅きり

碩 山

思ふふう新きききききききき

九 痛

伊勢

きききききききききききき

雀 皮

あきききききききききききき

一 幽

きききききききききききき

霞 涯

きききききききききききき

松 白

きききききききききききき

相 一

きききききききききききき

湛 石

山深きききききききききききき

省 吾

眼きききききききききききき

梅 咲

尾張

つゝもくゝ見るゆゑに河のやうなる
箕は原の明きよ河のやうなる秋
草もみもくゝつゝもくゝつゝもくゝ
鶴もくゝやうの類は日ぬきあつゝ
川明のきよきとるや命のや
きゝ菊ややふゝゝゝゝゝゝゝゝ
名月はおめけゝ照るやその月
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

而 后
美 山
我 竟
一 清
月 庵
芝 石
應 知
概 焉

月庭は一軒置ゝゝゝゝゝゝゝゝ
行をそのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝ崎や一束つゝゝゝゝゝゝゝ

鵜 居
蓬 陽
李 暖
梅 裡

三河

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
時をくゝやねのきき河原集
繼ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

牟 池
水 竹
青 可

水吐の濱をよこしに接續する

蓮宇

葦苗や志のうきをよみたり

福居

草と菊のうきをよみたり

塞馬

夢崎のうきをよみたり

波文

乞めくやま葉の中を唐のうき

朱芳

碧峯のうきをよみたり

完伍

遠江

あまのうきをよみたり

青笑

山菜むやうのうきをよみたり

旦松

駿河

りおのうきをよみたり

成元

梓のうきをよみたり

碧山

むらさきのうきをよみたり

路

伊豆

明のうきをよみたり

葉人

相模

冬枯や篠よりつゝ出る穀
立字
くかりやえきくさるるう
如く

甲斐

念佛の胡弓のけり年忘き
嵐外
啼りう庭よりきり松のう
飲哉

信濃

ちり欠ふちりおつゝ山暮れ月
星布

越中

我売のきくもつゝ人時のき
秀甫

加賀

風の中おかしきおのけをきり
折盡
ききうなるの葉のきや石の月
悠平

能登

ききうなるの葉のきや石の月
淇洲
ききうなるの葉のきや石の月
千蔵
山里におほる月をけしきき
霞曉

袖まゝのけやかきみの舟より
常とけいやうきけいしや月の重
きうかけの形りよむけのきき

語水
呂風
号

越后

風節のまじりぬるるるれ
海よりく風のききや船燈籠
月よりくまやのきき一先
栗柿と座の娘もやのきき月

茶山
其流
乙良
西晴

山より温るるもけいしや法や藤のき
山けりきききききききききき

青室
野眠

出羽

燕よりまきききききききききき
新雪や障子きききききききき
雪よりあききききききききき
雪よりあききききききききき
雪よりあききききききききき
雪よりあききききききききき

古翠
瑛山
守彦
玄子

秋の風——のちのちをひねの月
重なり引の我多枝のせうのうけ
やうくやうくこの夜の夢や 並様
雲うあふあふのひとをひ
新うをやうをうのを桜の雲
蜀黍を折るおとのきく月ん
落付をんおくる秋のこころ
ちのちやうく家内つぎん

竹 意
桂 枝
吟 雲
撥 月
水 竹
羽 人
緑 岸
輪 洲

酒飲ぬ飛翔もくましくひきく

二 五

陸奥

汲汲と魚の鱗や雲乃入
茶をのこつての茶——花うれ
くくくやねをたよりく家へ新
きくくくくくくくくくく
枇杷咲やきくくくくくく
石あけく九月日新や遠く

多 代
尾 橋
赤 唇
一 仙
英 泉
丁 酉

大地のふききりやうく其の水
 花の肉人なまそ居てかちこし
 おくきくく抱くくはるやうな山
 ると起す峰や落きう風の炭
 雲ゆく居きく抱くくく時をう
 道生や月明りきる石をたう
 旅うくうれくき日ありき能く振

大 費
 江 三
 心 阿
 一 止
 宗 古
 来 月 尼
 深 三
 号 阿

大費

江
三

心
河

止

宗古

乐月瓦

深
3

卷三

節まゝにけしき飛たり秋這星
梅嶺へけしきうへきめうれ
吹おろす楠のかきうやうとます
かきうとまうへきをかきうやうとま
古人 布 席
一 甫

松
分
臥
江

江差
字
鴉

一
甫

古人
布
席

上野

今更に華を綴るにけしむ
西馬
坪よりやうくうへに
風石
茶院

西馬

風石

下野

初あきや眼まつきたる物のけ
猶うきある日あつる夜も
垣おやゑるま糧のもむと
さうきあきやあき糧の下
積あけこふまの年木
物きり首かきけりま
引板えりしあきや料の
ふりまをぬけりまの

臥息 山外 抱像 由誓 麟旦 鳥吟 惟明 呂史

もろこし我もあきぬけり
あきやうきもあきぬけり
きりあきることあきぬけり
あきぬけりあきぬけり
夕顔やあきぬけり
垣あきぬけり
植あきぬけり
あきぬけり

菊 丁 菊 瓦 水 祖 為 流
枝 知 菱 村 狐 如 山 芝

着るやうに羽子つゝ所の如くに
 其のさうなりあつてもうな
 家こゝろもさねあふ海老よ
 下あふせつれゝそののちか
 三推へゆく村福や暗る蟬
 名月や数々志々を沖の舟
 川風さきさき萩や川に
 暗した人のさけや萩乃墓

了枝
 青府
 見方
 蓮衣
 夢来
 祇山
 司橋
 古木尼

舟を歩く回の時あるく月尺は
 永きりやおひつゝある音のゆゑ
 雨つゝりの夢の花より小窓に
 名月や一日山も人もあふ
 さつゝはさねあふつゝは
 上りぬる木より葉の下や萩乃墓
 是れりたよゝゝゝゝゝゝゝ
 人の背にやいとあふゝゝゝゝゝ

少
 臥
 若
 左
 右
 旭
 常
 赤
 著

門をきくふくかきし路中うき
雲霞やきくれきききききき

夷 貼
古 抵

草、唐芭蕉忌

未りきかけきききききききき

一 具

上 総

柿きききききききききききき

呼 牛

下 総

小楯きききききききききききき

幻 芝

新し城きききききききききききき

李 峰

乙子能きききききききききききき

之 桂

数きききききききききききききき

江 月

法 國 聖 水

明きききききききききききききき

石 外

きききききききききききききき

矢 速

秋風や湖の末きききききききききき

鳥 谷

席杖やきききききききききききき

波 同

唐のし終は、款をいれり
浦人ろくをふくともや
昔のりや、おのゆるみ

呂川
五株
荷了

常陸

しつゝるー浮きかきう
乙るー歌うれーまきー
うきねる浮るまきう
西晴る夏の曲る小敷う

うき
青里
再可
左明

あかしや前もしらも山つき

雲兆

そととあのみはうや牛の款

素菊

人きみーひーさひー細う

一兆

つる魚ーふ色ほーや舞を

民枝

貝壳はあろきひーや松のむ

友甫

さひーくさ難提うりむ

さち丸

灘をいー新や、石をのきつ

一瞥

りーのー裾をのむーさうけ

陶々

四時をりて黄華さうせう小室より
雛の雛引あやう泣きともいふ所
むかしきうらうらうとていふ所
手はまけの杖もわすれり物あをせ
竹植てうらなうぬ小室より
壁落て縋のうらう月夜うら
まゝゝゝ人より先は火をむし
時やあやう時をかりあやう

千尋 清見 古青 沙丈 蝶采 時来 規お 葉民

初もわすれりて黄華さうせう小室より
雛の雛引あやう泣きともいふ所
むかしきうらうらうとていふ所
手はまけの杖もわすれり物あをせ
竹植てうらなうぬ小室より
壁落て縋のうらう月夜うら
まゝゝゝ人より先は火をむし
時やあやう時をかりあやう

秋香 標末 一好 古文 大椿 市蕙 如祿 三川

蝸牛行むとふふきけり

五位

手もきかる子も面乞の人數少

一長

屋をかりける新燈やうめ柳

尺景

まききる用を家うまじす之根

方居

をあげていろはを中や相一葉

ふき

らふのまや横はまきふもつりき

貞松尼

尺へ居るわきまきうういふ接穂は

以成

流り来るきね屯や丘り柿

那景

少年

八葉女

あまのこゝろをいふかゝる

あまのこゝろをいふかゝる

あまのこゝろをいふかゝる

聖景

午時よちのうらなれぬあまのこ

半池

養父入のきねきふりて海をまじ

一具

まききる用を家うまじす之根

流芝

刻々たる鈴はきくふき月の秋

池

まききる用を家うまじす之根

景

おもひこゝろにふたふたのうらみ
 雲をよけし花をよけしうら
 しみこゝろにふたふたのうら
 しみこゝろにふたふたのうら
 しみこゝろにふたふたのうら
 しみこゝろにふたふたのうら
 しみこゝろにふたふたのうら
 しみこゝろにふたふたのうら

池 芝 池 芝 池 芝 池 芝

漏るる雨の音にうら
 しみこゝろにふたふたのうら

花をよけし花をよけしうら
 しみこゝろにふたふたのうら

見よとてのむらもといふ西の
 しみこゝろにふたふたのうら

卵をよけし花をよけしうら
 しみこゝろにふたふたのうら

花をよけし花をよけしうら
 しみこゝろにふたふたのうら

花をよけし花をよけしうら
 しみこゝろにふたふたのうら

花をよけし花をよけしうら
 しみこゝろにふたふたのうら

花をよけし花をよけしうら
 しみこゝろにふたふたのうら

池 芝 池 芝 池 芝 池 芝

汗をかき流るる清き水に流るる
啼き声なき子にわらふとあはれ
顔よりくも煙霞をさすぬき
律儀なまのこに踊る得意坊
ありきうにわらふ解も何う秘す
しらばねを出す節のうにま
謝らるるうつゝいゝも漏宵の月
さつとくとあはれさうし梅相

芝 池 菜 芝 池 菜 芝

煙より急ぐる出来ぬ角力あり
轉筋はやううとくある
見せつけの信約れも魚けうに
出入りあるぬ板のせんく
残しき二月にわらふ日
海苔のうきをたふさる新

芝 池 菜 芝 池 菜 芝

野巢 九句 卓池 九句
一具 九句 流芝 九句

蒼乳

ふね庵のそとへ戸口は松のむ
粒せうしうの外のそとへ

聖 菜

中を喰ふそとへと建あそびそとへ

一 具

こゝろとすくまゝなる村福

乳

大根をそとへしとやうそとへ

菜

やうなうのそとへそとへ

具

魂桐を流さるるをうし
ふところ中う乳ふところ
上家の流帝をうる人のあて
少く知むとまけはうつく
切喜のりえ素よあむううり
お丸う出都の梅をまの月
流はるる隣のをうかり人あき
踏もるやうなうと殺引

机 其 菜 机 其 菜 机 其 菜 机

とくあひの難ふとてあつて
精進より八海をんやうぬ
唐土おむるひもあつてむの中
ちうとて境のあつぬもあつて
難あつてあつてとてあつて
化難いことをあつてあつて
用おあつてあつてあつて
とてあつてあつてあつて

机 其 菜 机 其 菜 机 其 菜 机

野宮をゆくはてしなくも志すべく
 かりけさしはてしなくも
 沖面よりそと出でてそとゆき
 書物よりそと洗はれし
 うつゝき音を聴くは夢らし
 降るあけくは子にさる月
 十もころもそとゆくは枝むら実
 買人よりそと入るは庭のつる

野 宮 丸 々 々 々 々

社家町を飯茶らしむるは
 上戸よりそとあそびいとそ
 ちりしはれしはてしなくも
 たりやしむるはねつけし泥
 野宮をゆくはてしなくも

野 宮 丸 々 々 々 々

蒼丸十二句
 野宮十二句
 一具十二句

出代より終るまで一掃除き
 おいふふ湯の兄にぬれぬ
 持てとあゝ肩身はきかむ意任ひ
 長刀鋒より難子と記さる
 多めのけしき斗て暗あがり
 つも待軒は清るす面桶
 富能もおるあつるおまのあつて
 活きをとけとくもやと記さる

栄 々 栄 々 栄 々 栄 々

組振り来りて月日又世とし
 所々の桶を繋ぎあけし
 紙能のききゆきむのけりさき
 部能の代りて居り難う
 手拭きさけりさける落し角
 所能のききぬねのきりひ
 桐もおくききぬの候を吹さる
 日掛あつる人をさる

栄 々 栄 々 栄 々 栄 々

常春いのけり百あきるり屋

く町あきくく空を伸上る

昔話をもよほくつゆる葉の症

里子んくさふとりみちきる

言おけふ火口のけいぬあり

たうむと祝く着り舞舞

残る故の月と出く鳴こつふく

袴紐けりしけるむやつき

采

采

采

采

采

采

采

采

むきまの別像を志ひるうねそ

さー筆とりまふアささす

鼻紙もめる紙符の鼓をけし

然ー起く店ううと物

七日といふぬ遠速のむとくれ

方紀やまゑる時のうらか

采

采

采

采

采

采

一具十八句

野集十八句

純

W. 22nd St. N. Y. C.

W. 22nd St. N. Y. C.

W. 22nd St. N. Y. C.

W. 22nd St. N. Y. C.

W. 22nd St. N. Y. C.

W. 22nd St. N. Y. C.

W. 22nd St. N. Y. C.



